

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 28 日現在

機関番号：32637

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520703

研究課題名(和文) 修辞疑問文の生成プロセスと習得モデルに関する日英語比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study on the Production and Acquisition of English and Japanese Rhetorical Questions

研究代表者

松谷 明美 (Matsuya, Akemi)

高千穂大学・人間科学部・教授

研究者番号：60459261

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は英語と日本語の修辞疑問文を比較し、適切なコンテキストのもとで修辞疑問文が生成されるときに普通疑問文とは異なった音韻上の特徴が現れることを探る。日本語同様に英語においても、命題における行為が完全に遂行され、それを送り手と受け手が共有していれば、複数のwh疑問詞を含む修辞疑問文が容認されることを明らかにする。普通疑問文同様、wh句抽出に関して、島が絶対的なものではなく、非定形文の階層上低い位置からの抽出が可能であることを示す。幼児が共通背景知識を周囲の大人と共有できないために、疑問詞を含む修辞疑問文が発話されない傾向があることを示す。第二言語習得において英語の修辞疑問文が表れる頻度を探る。

研究成果の概要(英文)：This study explores the production and acquisition of rhetorical questions (RQs) with particular reference to English and Japanese. We show that some phonological characteristics appear when RQs are generated within the appropriate context. We clarify that English RQs with multiple wh-words are accepted, as Japanese RQs are, under the condition that the action, which is involved in the proposition, is completed, and both the addresser and the addressee share the knowledge. For both English and Japanese RQs, we demonstrate islands are not absolute and wh-words can be extracted from the lower position of the structural hierarchy of non-finite sentences. We prove that young children tend to have difficulties with the output of RQs because they cannot share common ground with the people around them. We explore how frequently RQs occur in the second language acquisition of the English of university students.

研究分野：言語学 英語教育

キーワード：統語論 運用論 英語教育

1. 研究開始当初の背景

1970年代以降、修辞疑問文 (rhetorical question) は統語・意味・運用の視点からの研究対象になってきている。Sadock (1971), Han (2002), Han and Siegel (1996) は、修辞疑問文は否定陳述と同じであると主張している。また、Caponigro and Sprouse (2007) は、共通背景知識 (Common Ground) を用いながら、普通疑問文 (ordinary question) がその質問に対しての真なる答えが送り手の確信 (belief) の中にないときに発話される一方で、修辞疑問文はその答えが送り手と受け手の両者の共通背景知識の一部である場合に発話されると主張している。

また Sprouse (2007) は、日本語の普通疑問文と修辞疑問文両方において複数の wh 疑問詞が表れることができるが、英語では修辞疑問文においては、複数の wh 疑問詞が表れないと指摘している。一方で、島の制約 (island constraints) に関しては、英語と日本語の両方で修辞疑問文は同様な振る舞いをしてしていると主張している。

修辞疑問文と否定陳述の伝達する意味が同じであるにも関わらず、発話においてなぜ修辞疑問文が優先的に生成される (発話される) のか、そして普通疑問文と修辞疑問文に見られる統語上の言語間の類似点と相違点が存在するのかについて、統語・意味・運用レベルを統合した視点からの説明することが課題として浮かび上がった。言い換えると、統語レベルから切り離された意味/運用レベルからのアプローチでなく、文を生成する computational system (計算システム) 内で、統語原則と意味/運用原則がどのように相互作用をしているか、さらに修辞疑問文に関する母語と第二言語習得プロセスはどのようなものか、そして修辞疑問文が外国語教育においてどのような役割を果たすかを探求する必要性があった。

2. 研究の目的

統語論、意味論、運用論の視点から修辞疑問文と普通疑問文との類似点と相違点を明確にし、さらに英語と日本語の修辞疑問文の類似点と相違点を再検討し、それらの言語事実の説明を試みたうえで、その生成・習得プロセスのメカニズムを探ることを目指す。修辞疑問文が生成されるときに、どのように performance system (運用システム) が計算システムに参与しているのか、言語の習得過程にある子供の母語話者が修辞疑問文を習得するときに、運用上の条件・原理が (周囲による) 入力と被験者の子供による出力に関与しているのかを検証することを目指す。さらに、非母語話者による第2言語としての英語の習得において、運用原理を順守した修辞疑問文を盛り込んだ言語経験を学習者にさせることで、英語の習得・学習をどれくらい促進させることができるかを探りたい。

3. 研究の方法

修辞疑問文が生成されるレベルはどこであるかを探るために、普通疑問文の場合に適切なコンテキストと修辞疑問文の場合に適切なコンテキストを母語話者である被験者に与え、その後それぞれ目標文を発話させる引き出し実験をおこない、被験者の発話を音声分析ソフト Praat で分析する。英語・日本語の大人の母語話者から、修辞疑問文・普通疑問文・複数の wh 疑問詞を含む修辞疑問文のデータを収集し、そのコンテキストとの関係、時制との関係、wh 疑問文の階層上の位置関係について、分析、考察する。データベース CHILDES を使い、母語として普通疑問文・否定陳述・修辞疑問文を習得する過程にある子供の被験者とその周囲の間とのやり取りをそれぞれ分析、比較することで、修辞疑問文の習得にどのような要因が影響を及ぼしているかを検討する。英語を外国語として学習している大学生に修辞疑問文を使った授業を行うことで、英語教育への効果を

検討する。

4. 研究成果

(1)統語論・意味論・運用論・音韻論の視点からの修辞疑問文に関する先行研究を分析し、特に意味・運用・音韻の仲介レベルを想定した実験をデザインして、まずは米国カリフォルニアとヴァージニアにおいて、適切な文脈を読ませて、英語の大人の母語話者にターゲットセンテンス(普通疑問文/修辞疑問文)を引き出す調査をした。音声分析ソフト Praat を使い、その結果を分析し、適切なコンテキストのもとで修辞疑問文が生成されると同時に普通疑問文とは異なった音韻上の特徴が現れることも分かった。

(2)英語と日本語の wh 疑問詞を含む修辞疑問文について、Sprouse (2007)とは異なり、適切なコンテキストのもとにおいて、複数の wh 疑問詞を含む修辞疑問文が可能になることを検証した。具体的には命題における行為が完全に遂行され、そのことを送り手と受け手が共有していれば、複数の wh 疑問詞を含む修辞疑問文が文法的であるとして容認される。これらから、wh 疑問文を含む修辞疑問文の生成の段階において、命題が関与しているという結論になった。また、付加詞節の種類に関わらず、英語の wh 疑問文を含む修辞疑問文は島の条件の抵触を示すことが分かったが、一方で日本語の場合は階層において低いところに位置する非定形の付加詞節の場合は、島の条件に抵触することはないことを明らかにした。これは、Beckx (2012)が普通疑問文における wh 句抽出に関して、島が絶対的なものではなく、非定形文の階層上低い位置からの抽出が可能であるという主張していることから、普通疑問文と修辞疑問文における類似点と言える。

(3)Reichenbach (1942)と Hornstein (1993)が提唱する時制理論(Tense Theory)に基づき、どのような条件下で複数の wh 疑問文を含む修辞疑問文が認可され、生成されるのかを検討し

た。Caponigro and Sprouse (2007)が提唱するように、修辞疑問文ではその発話時に送り手と受け手両方が真である答えを知っていることから、陳述文と同じように新しい情報が求められたり、加えられたりすることがないことから、Hornstein (1993)が提唱する基本時制構造と派生時制構造に関する制約や条件に適応させて、6 タイプの時制(現在・過去・未来・現在完了・過去完了・未来完了)の複数の wh 疑問詞を含む修辞疑問文の文法性を検証した。その結果、英語の場合、過去形の法助動詞+完了形の場合は適切な時制解釈を得られる一方で、イベントの実現性に欠く、意味論上条件的・仮定的な‘would’の場合は適切な時制解釈が得られないことが分かった。そして、Caponigro and Sprouse (2007)が主張するコンテキストにおいて、例えば‘first’など順序を示す語彙をいれることで可能になる一対解釈が wh 疑問文を含む修辞疑問文の生成を可能にするのではなく、統語レベルで得られる合法的な時制構造と運用レベルで送り手と受け手の両方で守られる共通背景知識に関する条件が、生成を可能にしているという結論に達した。

(4)修辞疑問文の生成には、送り手と受け手の両者における共通背景知識(Common Ground)が関わっているという想定のもと(Caponigro and Sprouse (2007)参照)、データベース CHILDES を使い、wh 疑問詞(特に‘何’(=‘what’))を含む修辞疑問文について、日本語を母語として習得する過程にある幼児とその周囲の大人との会話を抽出・分析した。平行して、wh 疑問詞を含む普通疑問文と wh 疑問詞を含む修辞疑問文と同じであると先行研究で主張されている否定陳述についても同様に幼児とその周囲の大人との会話を抽出・分析をした。周囲の大人によって修辞疑問文をインプットされる時期とその頻度については、普通疑問文と否定陳述とそれほど違いは見られなかったが(2歳2か月 - 2歳6

か月)、幼児によるアウトプットについては、普通疑問文が最も早く、発話の数も圧倒的に多かった。それに否定陳述が続いたが、発話数としては、その40分の1以下であった。調査対象の幼児のデータから修辭疑問文のアウトプットはなかった。幼児とその周囲のやり取りの内容から、幼児が共通背景知識を周囲の大人と共有できない限り、wh 疑問詞を含む修辭疑問文が発話されないという結論に到達した。言い換えれば、運用上の発達と統語の発達が関係していて、自己中心である年齢の低い幼児には修辭疑問文を発話することが難しいのではないかと推測された。

(5) 海外共同研究者である Patricia Hironymous (Glendale College)の協力のもと、アメリカの大学 ESL の授業で、修辭疑問文が現れる頻度を調査し、発話時に送り手と受け手両方が真である答えを知っているという背景がある修辭疑問文を使用することで、小論の論調や意見の表現方法を上達させる効果があることが明らかにした。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

松谷明美, 2015. Tense and Rhetorical Questions with Multiple Wh-words, 高千穂論叢 50号1巻, pp.285-296.

松谷明美, 2015. A Study on Derivation of Rhetorical Questions from a Pragmatic and Acquisition Perspective, 高千穂論叢 49号4巻, pp.35-48.

Matsuya, A. 2015. Pragmatic Competence and Acquisition of Rhetorical Questions, Proceedings of 13th Hawaii International Conference on Education, pp.1307-1318.

Matsuya, A. 2014. A Study of Wh-Question and Clefting Production in Children, Proceedings of 12th Hawaii International Conference on Education, pp.1120-1132.

Matsuya, A. 2013. Wh-movement and Clefting, Proceedings of 11th Hawaii International

Conference on Arts and Humanities, pp.1130-1139.

〔学会発表〕(計4件)

Matsuya, A. Pragmatic Competence and Acquisition of Rhetorical Questions, The 13th Hawaii International Conference on Education, January 5 2015, Hilton Hawaiian Village (アメリカ合衆国)

Matsuya, A. The Acquisition of Rhetorical Questions in Pragmatic Development, The 14th International Conference on Language and Social Psychology, June 20 2014, Ala Moana Hotel (アメリカ合衆国)

Matsuya, A. A Study of Wh-Question and Clefting Production in Children, The 12th Hawaii International Conference on Education, January 5 2014, Waikiki Beach Marriott Resort (アメリカ合衆国)

Matsuya, A. Wh-movement and Clefting, The 11th Hawaii International Conference on Arts and Humanities, January 12 2013, Hilton Hawaiian Village (アメリカ合衆国)

〔図書〕(計1件)

松谷明美, 2011. Notes on Wh-movement and Focus, 『ことばの事実をみつめて - 言語研究の理論と実証 - 』開拓社, 418頁(pp.157-167).

6. 研究組織

(1)研究代表者

松谷明美 (MATSUYA, Akemi)
高千穂大学・人間科学部・教授
研究者番号: 60459261

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし